三角定規× 2

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三角定規×２

【Ｎコード】
Ｎ６６１９Ｊ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
付き合っている貴匡と千里の喧嘩を何とか仲裁しようとする友人達。彼等はその中でお互いに。小山田いく先生の昔の作品みたいなものをイメージしました。

第一章

三角定規×2

はじまりはありきたりなものだった。
所謂痴話喧嘩である。惚れたはれたというのにすらまだいかないような。
「嘘よ、そんなの」
「だから嘘じゃないって」
いささか背の高いはっきりとした顔立ちの女の子が自分より少し背が高く茶色にした髪を長く伸ばしているやや面長の優しい顔立ちの相手に言っていた。
女の子は制服のスカートを短くしており奇麗な足を見せている。胸も大きく腰も締まっておりその制服の上からも見事なスタイルがはっきりとわかる。黒い目の光がとりわけはっきりとしている。
男の子の方は目も口もしっかりとしている。細くした眉は奇麗にへの字になっている。そしてスタイルもすらりとしている。そんな二人が教室で言い争っているのであった。
「何で千里ちゃん以外の女の子とそんなことをさ」
「だってお姉ちゃんから聞いたのよ」
「万里さんから？」
「そうよ、だから間違いないわよ」
こう返す住本千里だった。
「貴匡君が街で女の子と歩いてたってね」
「女の子って」
それを聞いた秋山貴匡はまずは困惑した顔になってしまった。
「僕が女の子と！？」
「しらばっくれるのね」
「女の子って誰とか」
その困惑した顔で千里に言い返すのだった。

「一体さ」
「だから貴匡君の浮気相手でしょ」
言葉は半分決めつけだった。
「貴匡君のね」
「それ何時のことだよ」
「昨日よ」
昨日だというのである。
「八橋中学の女の子とよ。しかも中学生となんて」
「中学生！？八橋中学！？」
それを聞いてすぐに表情を一変させた貴匡だった。
「あのさ、それで間違いないよね」
「ええ、そうよ」
その通りだと返す千里だった。
「お姉ちゃんはっきり言ってたわよ。証拠写真もあるって」
「証拠写真って」
「これよ。携帯で写メールしたものだって」
言いながら出してきたのは彼とその中学生の女の子が写っているまごうかたなき写真であった。見ればツインテールで可愛い顔の女の子である。二人並んでにこやかに街を歩いている。
「この娘に間違いないわよね」
「ってそれ妹だけれど」
ここでこう返した貴匡だった。
「その娘って」
「えっ！？」
「えっ！？じゃなくてさ」
驚いた声をあげる千里に対してさらに話す。
「妹だよ。妹の祥子」
「妹さんって」
「会ってるじゃない、一回か二回」
このことも話した貴匡だった。

「僕の家でさ」
「そうだったの！？」
「そうだったのじゃなくてほら」
今度は貴匡の方から携帯の写真を出した。そこにはその中学生の女の子と二人が貴匡を中央にして楽しく笑っている姿があった。
「ちゃんと一緒に写ってるでしょ」
「確かに」
「何で覚えてないんだよ」
「それはまあ。ちょっと」
形勢逆転だった。千里は急にしどろもどろになってしまった。そのしどろもどろの調子で貴匡に対して釈明をするのだった。かなり苦しい。
「私、人の名前と顔覚えるの苦手で」
「それでなんだ」
「御免なさい、お姉ちゃんも事情知らなくて」
「万里さんが知らないのはいいよ」
流石に彼女の姉までは、ということである。
「けれどさ、何で千里ちゃんが知らないんだよ」
「御免なさい、ちょっと」
「ちょっとじゃないよ、本当に」
貴匡はその眉も目も思いきり顰めさせていた。
「何でこんなの覚えてくれないんだよ」
「何ていうか」
「全く。それでそんだけ騒いで」
「騒いだのは仕方ないでしょ」
今まで弱っていたがここでまた勢いを取り戻した千里だった。その顔を少しきっとさせてそのうえで貴匡に対して反撃に出るのだった。

第二章

「それはね」
「仕方がないって？」
「大体ね、貴匡が言っていれば」
完全に逆キレであった。
「こんなことにはならなかったじゃない」
「何で僕が言わなくちゃいけないんだよ」
「昨日妹さんと一緒だったってね」
「妹のことは関係ないじゃないか」
「いいえ、あるわよ」
「ないって」
この喧嘩は遂にお互いが同時に背を向け合うことで終わった。その二人に対してそれぞれ友人達が来てそれで慰めにかかるのだった。
「まあな。落ち着けって」
「頭を冷やせ、な」
貴匡に対しては男友達二人が来た。そして千里にも。
「そんなに怒ることでもないし」
「それで後で千里ちゃんとな」
「いいよ」
しかし貴匡は怒った顔と声で二人に言い返すのだった。
「もうさ、いいよ」
「いいって」
「どういうことなんだよ」
「もう千里ちゃんのことはいいよ」
こう言うのである。
「もうね」
「まさか御前」
「ひょっとして」

「何でここまで言われないといけないんだよ」
こう言って怒っていた。
「妹と一緒にいただけでさ」
「おい、こりゃ」
「まずいぞ」
その二人橋本卓也と奈良谷六郎は貴匡の態度に真剣に危ないものを感じていた。
卓也は背の高いがっしりとした角刈りの男で六郎は小柄である。二人は完全に水と油というよりは二人並ぶとまさに正反対であった。
二人は貴匡の小学校からの親友である。高校では同じクラスで楽しくやっている。まさに最高のトリオであるのだ。一人のこの態度に残る二人が困惑していた。
そしてそれは。千里の方も同じであった。
「ちょっとあんた」
「何やってるのよ」
彼女にも女の子二人がやって来て言う。
「あんなこと言って」
「あんたが悪いわよ」
「私が悪いっていうの？」
千里は二人に言われて顔を顰めさせた。
「何でそう言うのよ」
「何でってね」
「どう見たってそうじゃない」
二人は今の千里の言葉に目を怒らせてきた。一人は背が高くすらりとしていてもう一人は小柄で胸が大きい。背の高い娘は髪を後ろで束ねていてやや垂れ目であり小柄な娘は赤毛を伸ばしている大きなどんぐりに似た目の女の子であった。そんな二人が言うのだった。
「あれじゃあ貴匡君だって怒るわよ」
「そうよ」
「怒るって」

「誤解じゃない」
「ねえ」
二人はまた千里に対して言った。背の高い娘の名前は大江理美といい小柄な娘は力石沙耶という。二人は千里の小学校からの親友である。
「あんなのしたら」
「絶対に」
「絶対にって」
二人に言われてかなり困惑した顔になる千里だった。
「私が悪いって」
「絶対に悪いよ」
「そうそう」
二人はまた千里に対してこう告げた。
「あんたの誤解であそこまで言って」
「早く謝りなさいよ」
「謝るっていっても」
そう言われても今はとてもそんなことをしようと思えない千里だった。彼女もかなり意固地になってそのうえで言うのだった。

第三章

「私はそんな」
「いいや、あんたが悪いわよ」
「そうよ」
理美と沙耶はまた千里に言い返した。
「だからよ。わかったわね」
「謝っておきなさいよ」
「嫌よ」
今度ははっきりと言い切った千里だった。
「私は絶対にね」
「やれやれ、こりゃ駄目ね」
「どうしようもないわね」
今の千里の言葉を聞いて二人はこれ以上言うのを止めたのだった。
千里は二人にもぷい、と背中を向けてそのうえでクラスから出た。
貴匡も彼女の方を見ようとしない。卓也と六郎もそんな彼を見て苦い顔になっていた。
「このままいったら」
「破局か？」
二人は最悪の事態を想定せざるを得なかった。
「どうしたらいいんだろうな」
「このままいったらな」
二人はあれこれ考えだしていた。そうして同時にだった。理美も沙耶も彼等と同じ様に暗い顔になってそのうえで話をしていた。
「あいつ、自分が悪いのにね」
「あれはないでしょ」
こう言って話し合うのだった。
「このままいったら本当に」
「困ったことになるわね」

彼女達もまた最悪の事態を考えていた。このままでは、と。そして彼女達はあることを思いついたのだった。
「やっぱりここは」
「私達で何とかするしかないわね」
こう話すのだった。
「あのままじゃ千里意固地になるばかりだしね」
「こっちでね」
「とはいってもよ」
「問題は」
何とかしようと言ってもだった。具体的に何をするかというとどうにも思い付くことがなかった。何をしようかというとなのだった。
「どうしようかしら」
「何か考えある？」
沙耶が理美に尋ねた。
「あんたには」
「いえ、何も」
こう答えるしかない理美だった。
「思いつかないのよ、これが」
「私もなのよね」
沙耶もまたここで溜息を出すだけだった。その大きな胸だけが目立っていた。
「特にね。思いつかないのよ」
「どうしようかしら」
理美は困り果てた顔で言うだけだった。
「それで」
「どうにかしないといけないけれどね」
「それはわかってるけれどね」
二人ではどうしようもなくなっていた。そしてそれはもう一方も同じだった。
「おい」

「ああ、それだろ？」
六郎が卓也に応えていた。
「あいつな。どうしようかな」
「何か考えあるか？」
卓也は六郎に対して問うのだった。
「何か。あるか？」
「そう言われてもな」
だが六郎は首を傾げさせてそう述べるだけだった。
「俺も。どうすればいいんだ？」
「俺もそれがわからないんだよ」
卓也もこう言うだけだった。
「何をどうすればいいのかな」
「わからないよな」
「さっぱりな」
こう言い合うだけの二人だった。

第四章

「どうすればいいのか」
「困ったことだよ」
「けれどな」
卓也は六郎を見ながら話してきた。
「このままだとあいつ等な」
「別れるな」
六郎は最悪の未来を言葉に出した。
「このままだったらな」
「そうだろ？だから何とかしないとな」
「そうだったら何とかしないといけないだろ」
「どうしたものかな」
二人もまたどうするべきかわからなかった。二人だけでは無理だった。貴匡も千里もそれは同じでどうしたらいいのかわかりかねていた。
「許したらいいんだろうけれど」
「謝ったらいいけれど」
二人はそれはわかっていた。しかし今はどうにもできなくなっていた。それで二人共お互いに何もできないまま時間だけが過ぎていっていた。
数日経ってもどうしようもなくなっていた。時間が解決するとそうはならなかった。どうしようもなくなっていて周りも息苦しい雰囲気の中にあった。
それは二人のそれぞれの親友達もだった。彼等は数日間あれやこれやと話すばかりだったが今の問題を解決することはできなかった。
「このままじゃって思うんだけれどな」
「だよなあ」
「本当に別れるかも知れないのに」

「どうしようかしら」
あれこれ話しているがやはり解決案は出ない。それで困っているとだった。
「んっ！？まさか」
「あっちもか」
卓也と六郎が二人に気付いた。
「若しかして」
「向こうもなの？」
理美と沙耶もだった。ここでお互いに気付いたのである。
「なあ、思うんだけれどな」
「二人じゃ駄目でもか」
「ああ、それだよ」
卓也は六郎に対して話した。
「それな。どうだよ」
「そうだな。悪くないな」
六郎も卓也のその言葉に頷いた。
「それはな」
「四人いれば何とかなるかも知れないぜ」
卓也は真面目な顔で述べた。
「四人か」
「どうだよ」
あらためて六郎に対して声をかけて促す。
「それで」
「そうだな。いいな」
そして六郎もそれでいいと頷くのだった。これで話は決まった。
その頃理美と沙耶もだった。二人もまたこれからのことについて話していた。
「私達だけじゃどうにもね」
「無理かしら」
「多分」

理美が沙耶に対して話していた。
「二人じゃね。やっぱり限界があるわよ」
「そういえばそうかしら」
沙耶は理美の話を聞いてこう述べるのだった。
「二人だけじゃね。それに」
「それに？」
「両方がいての話よね」
沙耶はそれに気付いたのである。千里だけの話ではないことにである。それに気付いたのである。
「それじゃあ」
「何か考えがあるの？っていうか思いついた？」
「思いついたわ」
はっきりと答える沙耶だった。
「向こうと話をしましょうよ」
「向こうって秋山君と？」
「そうよ、彼とね」
貴匡だというのである。
「彼の方と話してみない？」
「そうね。悪くないかもね」
理美も相棒のその言葉に賛同して頷いたのだった。

第五章

「それで」
「じゃあ彼のところに行こう」
「いえ、ちょっと待って」
しかしだった。理美はここで自分でも考えた。そうしてそのうえで沙耶に告げるのだった。
「それよりもよ」
「秋山君に対して話さないの？」
「それよりも二人と相談しない？」
こう言うのである。
「いつも彼といるね」
「ああ、あの二人ね」
それを聞いてすぐに頷いた沙耶だった。
「橋本君と奈良谷君ね」
「そう、その二人よ」
あくまでその二人だというのである。理美が言うには。
「その二人と話をしてね」
「わかったわ。それじゃあ」
沙耶は理美のその言葉に頷いた。そうしてそのうえで二人の方に向かうのだった。
四人はほぼ同時にお互いのところに向かい鉢合わせになった。彼等の思惑も行動も見事なまでに一致することになったのだった。
「あれっ、まさか」
「そっちも！？」
最初に声をあげたのは卓也と六郎だった。
「やっぱりあの二人のことで」
「思うところがあって」
そしてそれは理美と沙耶もだった。彼女達もだった。

「こっちもそう思っていたけれど」
「そうだったの」
理美も沙耶もお互いを見て言うのだった。
「何か話が早いっていうか」
「そうね」
「じゃあさ」
六郎が二人に対して声をかけてきた。
「話だけれど」
「あの二人のことよね」
「そう、あの二人な」
まさにそれだった。彼等のことをそのまま話すのだった。
そうしてだった。彼等はさらに言っていく。
「あのままじゃな」
「そうね」
沙耶は六郎の言葉に頷くのだった。
「終わるな」
「あのままじゃ間違いないわね」
その見方も同じだった。貴匡と千里のことにかなり危惧を覚えているのだった。
「だからどうするかだけれど」
「何かある？」
理美は六郎だけではなく卓也に対しても尋ねた。
「それで」
「そうだなあ。あれじゃない？」
六郎は腕を組んで顔をあげて述べた。
「住本さんに問題があったと思うし」
「そうよね。確かにね」
沙耶も彼のその言葉に頷いた。
「あの娘が誤解したから」
「けれどあいつもなあ」

六郎が今度言ったのは貴匡のことだった。
「ちょっと問題があるだろ」
「問題があるっていうかね。意固地になってない？」
理美はそこを指摘した。
「あんまりにも」
「それって千里もだしね」
沙耶は彼女についてもだというのだった。
「あの娘もさ。何か意固地になってるじゃない」
「謝らないわね、このままじゃ」
理美はその流れがわかっていたのだった。
「それで結果としてね」
「問題はそこだよな」
六郎はポイントがはっきりとわかった。
「千里ちゃんをどうするかだな」
「あの娘ね」
困った顔で言ったのは理美だった。
「一旦ああなったら強情だから」
「こっちはそうでもないんだよ」
卓也が言うのは貴匡についてだった。

第六章

「別にな」
「そうなの。別になの」
「ああ、こっちは安心していいよ」
こう述べるのだった。
「別にな」
「そう。じゃあそっちは安心ね」
「いや、安心でもないだろ」
それはすぐに懐疑的に返した六郎だった。
「だってよ、千里ちゃんがそんなのだったら結局同じだろ」
「そうよねえ。結局同じなのよね」
沙耶も六郎のその言葉に頷くしかなかった。
「一方がよくても一方が駄目じゃね」
「どうしよう、それで」
彼等は困った顔になってしまった。四人共である。
「これから」
「こういう場合はまあ。自然にいくとな」
六郎は首を傾げながら述べた。
「あれだろ。悪い方が謝ったら済むんだけれどな」
「だから千里は」
すぐに反論する沙耶であった。
「強情よ。それも今は普段以上に」
「わかってるさ。だから悩んでるんだよ」
「悩んでるのはこっちもよ」
沙耶も同じだというのだった。見ればその眉が顰められている。
「どうしたらいいのかしらね」
「これはだけれど」
しかしここで卓也が言った。

「あいつには悪いけれどさ」
「あいつって？」
「貴匡だよ」
彼だというのである。
「あいつにはな」
「悪いって何でだよ」
六郎は卓也のその言葉に首を傾げさせるしかなかった。
「何を考えてるんだよ、一体」
「ちょっと策をな」
いささか何かの歴史小説みたいな言葉を出してきた卓也だった。
「考えたんだよ」
「策！？」
「ああ、策な」
また言うのだった。
「策を考えてるんだよ」
「策って何なの？」
「こっちもちょっと考えてたけれど」
理美はそのまま問うただけだったが沙耶は違っていた。こう言ってきたのである。
「まあ一応はね」
「それどんなのかな」
卓也は沙耶のその言葉を聞いてすぐに尋ね返した。
「力石さんの考えは」
「まず二人を何処かに連れて行って」
まずはそうするというのである。
「そこでお互いを見えないようにしてね」
「うん、それで」
「そのうえで言わせたらいいのよ」
こう言うのであった。
「謝りたい、それで」

「許したいだよね」
卓也は沙耶のその言葉に合わせてきた。
「そういうことだよね」
「あっ、わかったの」
「俺も同じこと考えたからね」
だからだというのである。彼も同じことを考えていたのである。
「だからなんだよ」
「そうなの。橋本君もだったの」
「そうなんだ。何かあいつを騙すようで悪いなって思ってるけれど」
それでもなのだった。解決する為には、であった。
「それでどうかなってね」
「このままじゃ絶対にお互い謝ったり許したいしないからね」
沙耶は言った。

第七章

「だからそう考えたのよね」
「そうだよ。けれどこれならね」
「いけるわね」
二人で言い合うのだった。
「これでね」
「うん。黙るようになるけれどさ」
そのことがどうしても引っ掛かる卓也だった。しかしそれでもなのだった。
「今回はそれでいかないとね」
「別れるなんてことになるからね」
「それじゃあ後は場所だな」
「何処にするかよね」
二人の話を聞いて六郎と理美が言ってきたのだった。
「二人を行かせてそれでまずはお互いが見えないようなな」
「そういう場所がいいわよね」
二人は卓也と沙耶の話を聞いてすぐにそれにはどうした場所がいいのか割り出したのだった。そうしてそのうえで言うのであった。
「何処かな」
「学校がいいかしら」
今度は二人の話になっていた。二人であれこれと話す。
「お互いを挟んでそれでいて最初は見えないようにしていて」
「そうね、移動式の折り畳みテーブルか何かを壁にしてね」
「場所は空いている何処かの教室がいいかな」
「ああ、第一校舎の二階の手芸部の部室の横が空いてるわよ」
こうして二人が場所と舞台設定を考えたのだった。後は動くだけだった。
「じゃあ俺達があいつ等を部屋に呼んで」

「あんた達が舞台設定ってことよね」
卓也と沙耶が六郎と理美に対して話した。役割分担も決めたのである。
「それでいいよな」
「そちらは頼むわね」
「ああ、わかったよ」
「それじゃあやっておくから」
こうしてまずは離れてそれぞれの仕事に取り掛かった。卓也と沙耶は二人を呼びに行くがそこでまた打ち合わせをするのであった。廊下を歩きながら。
「秋山君が何処にいるかわかる？」
「まあある程度は」
見当がついていると答える卓也だった。
「もうな」
「そう。だったら問題ないわね」
沙耶はそれを聞いて納得した顔で頷いたのだった。
「それでね」
「そっちはどうなのかな」
今度は卓也が沙耶に対して尋ねた。
「検討ついてる？住本さんの居場所」
「少しはね」
ついていると答えるのだった。今は放課後である。
「部室よ。あの娘映画研究会だから」
「そこの部室にいるんだ」
「そっちは？」
「あいつハンドボール部だからグラウンドだな」
彼ももうある程度絞ってきていた。
「あそこにいるな」
「そう。だったらお互いそこに行ってね」
「それでいいよな」

「ええ、いいと思うわ」
こう答えて卓也に対して頷いたのだった。
「じゃあ。御願いね」
「ああ、そっちこそな」
言い合ってそのうえで別れる。そしてその頃六郎と理美は部屋の設定をしていた。教室の前後の扉を開けて中央に折り畳み式の黒いテーブルを置いてそのうえで向こう側を見えないようにした。これで部屋を二つに分けてしまったのである。そうしようとしていた。
理美が今そのテーブルを動かしていた。車輪がついているので動かしやすくはある。だがうっかりとしてバランスを崩してしまったのだった。
「あっ」
「おっと」
ここで六郎がすぐにそのテーブルを反対側から支えたのであった。それで難を逃れた。
「危なかったよな」
「そうね」
理美もまたほっとしていた。そのうえで自分よりも背の低い彼を見て言うのだった。

第八章

「有り難う」
「いいさ。それじゃあ俺達も」
「一旦部屋を出てね」
「いや、出ることはないかな」
六郎は少し考えてから述べたのだった。
「別にね」
「ないの？」
「ここにいたままで橋本の奴があいつを連れて来るのを待ってそれから話を聞いてやるふりをすればいいじゃない」
「じゃあ私は向こう側で沙耶が連れて来たあの娘を待って」
「そうしよう」
にこりと笑って理美に告げた。
「それでどうかな」
「そうね」
理美も少し考えてから。そのうえで六郎のその言葉に頷いたのであった。
「それでいいわね。確かに」
「じゃあ決まりだな。もうちょっとしたら位置に移ろう」
「そうしたらいいわね。それにしても」
ここで理美はあらためて六郎に対して言った。その彼を見ながら。
「奈良谷君って」
「俺が？」
「力強いのね」
先程のテーブルの話である。すぐに反対側から来てそのうえで引き戻してそれでバランスを元に戻したからである。それを見ての言葉なのだ。
「案外」

「そうかな」
そう言われても実感がないといった顔で首を捻るだけの彼だった。
「俺は別にそうは」
「けれど有り難う」
「有り難う？」
「だって。助けてくれたじゃない」
だから御礼を言うというのであった。
「助かったわ、本当にね」
「そう。だったら」
六郎はその言葉に頷いた。理美のその言葉が強く心に残った。
それからも用意を続け完全に終わった時だった。それぞれメールを取り出して合図をするのだった。
「よしっ」
「できたわね」
それを受けた卓也と沙耶は会心の笑みを浮かべたのだった。
「それじゃあ後は」
「鉢合わせしないようにして」
今それぞれ貴匡と千里を部屋に連れて来ている。貴匡は部屋の左手にすぐ出る階段を降りていて千里は左手から部屋に向かっている。丁度鉢合わせの状況なのだ。
それでまずは卓也が階段が終わり教室に入る前に。わざと懐からあるものを階段の終わったところに落としてしまったような演技をするのだった。
「あっ」
「どうしたんだ？」
「しまったなあ」
それを落としてしまい参った様な演技をしてみせるのだった。
「これはなあ」
「参ったってどうしたんだよ」
「いや、コイン落としたんだよ」

こう言うのであった。
「コインな」
「コインか」
「ああ、それな」
それを落としてしまったというのである。
「参ったな、本当に」
「それでコイン何処に行ったんだよ」
「あれっ、何処だ？」
早速探しはじめる貴匡だった。
「何処に行ったんだ？」
「ああ、それがな」
卓也は探すふりをする。しかし見つからない。どうしてもだった。
「何処なのか全然わからないな。なくなったか？」
「なくなったら困るものか？」
「おまじないなんだよ」
一応こういう話にするのだった。
「おまじないに持ってるんだよ」
「おまじないにか」
「そうなんだよ。何かそのコインを一週間持っていたらそれで願いが適うってな」
「何か随分いいものだな」
それを聞いてふと応える貴匡だった。

第九章

「一週間持っていればか」
「まだ六日なんだよ」
その持っている時間まで言うのだった。なおこれは全て作り話である。彼が今時分の思いつくままに設定しているだけであるのだ。
「あと一日なのにな」
「そうか。じゃあ絶対に見つけないとな」
「そうだろ？だからな」
そう言いながら探すふりをする。しかしあくまでふりはふりだ。彼は探すふりを続けながら耳をそばだてていた。そのうえで聞いているものがあった。
（もう少しかな）
扉が開く音をだ。待っているのだ。
それはもうすぐの筈だった。だがそれは中々来ない。少なくとも彼にはそう思える時間だった。しかしそれも遂に、であった。
扉が開く音がした。一瞬だった。しかし彼はそれを見逃さなかったのだ。
（よし）
それを聞いて心の中で会心の声をあげる。そして芝居を変えるのだった。
「あっ」
「見つけたのか？」
「ああ、ここにあった悪い」
言いながらポケットからそのコインを出してみせたのだった。出してきたのは只の十円玉である。それを貴匡に対して見せるのであった。
「俺が持ってたよ」
「おいおい、しっかししれくれよ」

貴匡はその彼の言葉を聞いて苦笑いで返すのだった。
「持ってるんだったよ」
「御免御免」
「まあ見つかったらいいさ」
人のいい彼はそれでいいとするのだった。そうしてそのうえで卓也に対して述べた。
「それじゃあ。確か」
「ああ、そっちのクラスな」
言いながらすぐに左手を指差すのだった。そこに彼等が目指すそのクラスがあるのだ。
「そこで聞きたいことがあるからな」
「ふうん、そうなのか」
「じゃあ入るか」
「ああ、悪いな」
こう話しながらそのうえで彼を部屋に入れるのだった。
するとそこには六郎がいた。彼も芝居をして言うのであった。小声で言うのだった。
「よお」
「あれっ、御前もいたのかよ」
「ちょっとな卓也と一緒に考えてな」
こう言うのだった。あくまで小声である。それはまるで貴匡をそこに入れるかの様であった。
「それでなんだけれどな」
「それで？」
「そうだよ。聞きたいことがあってな」
こう話すのだった。その間に囲いの向こう側では千里が理美や沙耶と話していた。あえて小声にしてだ。そのうえで話すのだった。
「ねえ」
「それでよ」
「何よ」

千里は自然とそんな二人の言葉を受けて。彼女も小声になっていた。そうしてそのうえで二人に対して言葉を返すのであった。そうしてである。

「秋山君のことだけれど」

「どう思ってるのよ」

怪訝な顔を作って問い返してみせた理美と沙耶だった。

「あんたが悪いと思わない？」

「誤解なんだし」

「それはね」

親友の二人にこう言われるとだった。千里も無下に言うことはできなかった。顔を曇らせてそのうえで困った顔で話すのであった。

「悪いと思ってるのね」

「思ってるわよ」

「それ嘘じゃないわよね」

二人はここぞとばかりに千里に話す。

「じゃあさ。謝りたい？」

「そう思ってるの？」

「ええ」

この返事は二人の思う通りだった。千里は気付かなかったが彼女は二人の言葉を聞いていてそのうえで話すのであった。

第十章

「そうだけれど」
「じゃあさ。謝れるわよね」
「悪いって認めて」
「うん」
二人の言葉にこくりと頷く。そうしてその頃。部屋の向かい側では貴匡達が話していた。三人で小声であれこれと話をしているのだった。
「なあ。それでだけれどな」
「どう思うんだよ。それで」
二人はここぞとばかりに貴匡に問う。やはり小声でありそれで以って彼を小声にさせていた。
「千里ちゃんが謝ったらな」
「許せるよな」
「そりゃな」
その言葉には確かに頷くことができた貴匡だった。
「あいつが謝ってきたらな」
「そうだな。できるんだな」
「許せるんだな」
「ああ」
声もまた確かなものだった。やはり頷くのであった。
「俺も。千里がそうしてくれるんなら」
「そうか。ならいいさ」
「それでな」
二人はこう言っていく。そうしてまた壁の向こうでは。千里達が話の大詰めに入っていた。
「じゃあいいのね」
「謝れるのね」

「うん」
二人の言葉にまた頷く千里だった。
「やれるわ。絶対にね」
「そう、わかったわ」
「あんたのその心ね」
二人は千里のその言葉を受けた。そのうえでさらに言ってみせた。
「それじゃあだけれどね」
「練習する？謝ることの」
こう彼女に言うのである。
「ちょうどここにいるの私達だけだし」
「できるかしら」
「練習？」
それを聞いた千里は思わず二人を見てしまった。少しばかり怪訝なものになってしまったその顔で。二人を見てしまったのである。
「練習って？」
「本番になったら謝ることできないわよね」
「だからよ」
だからだというのであった。二人は。
「いいわね、それで」
「ここで練習してみましょう」
また千里に囁く。そっと、わざと優しい声で。
「いいわね。それじゃあ」
「ここでね」
「わかったわ。じゃあ」
二人の言葉を受けてだった。千里は意を決した。そうして言うのだった。
「今ここでね」
「そうよ。ここでね」
「声は大きくしてね」
「ええ」

こくりと頷くとだった。意を決して言った。
「御免なさい」
まずはこう言った。
「貴匡、御免なさい」
部屋全体に聞こえる様な大きな声での言葉だった。
「私が悪かったわ。御免なさい」
「言えたじゃない」
「それでいいのよ」
二人は彼女のその謝罪の言葉を聞いてにこりとした。
そうしてだった。そのうえで。覆いの向こう側に声をかけたのであった。
「聞いた？」
「聞いたわよね」
明るい声であった。それを向こう側にかけたのであった。
「ちゃんと謝ったわよ、千里」
「確かにね」
「よし、じゃあ」
「いいよな」
するとだった。千里にとっては思わぬことに。突然覆いが動いて部屋の向こう側が出て来た。そうしてそこに立っているのは。

第十一章

「えっ・・・・・・・」
「嘘・・・・・・・」
唖然として驚く千里だった。そして驚いているのは千里だけではなかった。
そこに立っていた貴匡もそうだった。彼も唖然としていた。
「何でここに」
「いるんだよ」
「おい貴匡、聞いたよな」
「千里ちゃん謝ったぜ」
しかし二人に考える時間は与えられなかった。卓也と六郎がすぐに彼に声をかけてきたのである。まさに考える時間を与えない為である。
「これでいいよな」
「謝ってくれたんだから」
「あ、ああ」
突然の事態と言葉に唖然となったままであるがそれでも応える貴匡だった。
「じゃあ」
「ほら、言ってあげなよ」
「今ここでな」
「わかった。それじゃあな」
貴匡は彼等の言葉に頷いた。そうしてそのうえで千里に顔を戻して述べた。
「千里さ」
「ええ」
「わかったよ」
微笑んでの言葉であった。

「それでさ」
「そう、許してくれるの」
「いいよ、もう」
許すというのであった。これもまた微笑んでの言葉だった。
「それでさ。謝ってくれたから」
「有り難う。じゃあ」
「仲直りしようか」
貴匡からの言葉であった。
「これでな」
「そうね。それじゃあ」
千里は顔を真っ赤にさせていた。そのうえで彼に応えるのだった。
「これで。もうね」
「うん、仲直りだよ」
二人で言い合うのだった。これで二人の仲は戻ったのだった。
そんな二人を見ながら四人は教室を出た。仲直りを果たした彼等にまだ何か言う程彼等は野暮ではない。そういうことなのである。
四人で歩きながらだった。卓也は沙耶と、六郎は理美と並んでいる。そのうえでそれぞれ話していた。
「上手くいったよな」
「そうね」
理美は六郎のその言葉にこくりと頷いた。
「大丈夫かなって思ったけれど」
「大丈夫になったよな」
「よかったわよ」
六郎の言葉を受けてまた微笑む理美だった。
「おかげでね」
「そうだよな。それでさ」
「何？」
「怪我とかないよな」
心配する顔になって理美を見ての言葉であった。

「さっきのテーブルを移動させた時に」
「ああ、大丈夫よ」
笑ってそれを否定する理美だった。
「何ともないから、全然ね」
「ならいいんだけれどな」
理美のその言葉を受けて六郎も笑顔になった。
「だったらな」
「心配してくれたんだ」
六郎のその優しさを今知ったのである。
「有り難うね」
「いいって」
小柄なその顔で理美を少し見上げての言葉だった。
「そんなのはさ」
「いいのよ。本当に有り難うね」
それでも言う理美だった。とにかく二人はこれで笑顔になっていた。
そして卓也と沙耶も。それぞれ言い合っているのであった。彼等も彼等で。
「これでハッピーエンドだけれど」
「一時はどうなることかって思ったな」
「全く」
困った様な微笑を浮かべて言った沙耶だった。
「本当にね。どうなるかってね」
「けれどよかったよ」
ここでこんなことを言う卓也だった。
「上手くいってな」
「そうよね。別れずに済んだし」
「俺達だけじゃどうにもならなかったよ」
卓也はこんなことも言ったのだった。
「本当にな」

「けれど四人だったら」
「何とかなったわね」
理美も沙耶も笑顔で応えた。
「それじゃあ何とか」
「やっていけそうね」
「じゃあこれからどうする？」
六郎が話した。
「とりあえずあの二人は上手くいったけれど」
「そうだよな。四人で何処かに行くか？」
卓也が六郎のその言葉に応えた。
「祝いにな」
「そうだな。ラーメンでも食いに行くか？」
六郎は彼の話を聞いてラーメンを出した。
「それで四人でな」
「あっ、いいわね」
「四人で。違うわね」
理美と沙耶がここで言った。
「二人ね。二人と」
「二人になるわね」
「二人？そうか」
「二人か」
卓也も六郎もそれで頷いた。皆で言い合う。
そうしてだった。四人ではなく二人と二人で二人の祝いをしに行く。復縁とはじまりの祝いに。

三角定規×２　　完

２００９・１０・１３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6619j/

三角定規×２

2010年10月8日15時24分発行